

1 香川県の子どもたち～「全国学力・学習状況調査」の結果から見えてくるもの～

昨年度の本調査の分析データを基に香川の子どもたちの傾向や課題について説明。全国と比べると、学力全体では平均より上位ではある。ただ、気になる点としては、「国語への関心・意欲が低い」ということである。「国語の学習が楽しい、もっと本を読みたい」と感じている児童・生徒の割合が全国平均よりも少ないということは、普段の学習で子どもたちの興味を十分に高める手だてに少し課題があるのかもしれない。

<これからの国語科授業で大切にしたいこと>

「活動が楽しい」ということはもとより、「分かる・できた・使えた」という喜びを子どもたちに味わわせていくことが重要である。教師は、単元を構成する時に、楽しそうだからという理由だけで言語活動を設定するのではなく、単元を通して身に付けたい力を明確にし、その力を学習を通して子どもたちに確実に身に付けさせていかなくてはならない。身に付けた時に得られる喜びを大切にしていこうとすることで、国語への関心・意欲は高まっていくのではないだろうか。

2 「活用できる力」とは「習得したものを、文脈を変えられても活用できる力」

ここでは、資料中の全国学力・学習状況調査のB問題を取り上げての演習。

（資料に紹介された問題）

3 中川さんの学級では、夏休みに読んだ本の中で心に残ったものを感想文に書き、図書新聞にのせることにしました。先生が、感想文の書き方の勉強になるように二人の感想文をしょうかいしました。同じ本について書いた二人の感想文を読んで、あとの問いに答えましょう。

（青木さんと高橋さんの感想文は省略）

先生は、この二人の感想文はどちらも良い書き方だとみんなにしょうかいしました。二人に共通する良い書き方とは、どのようなことですか。二つ書きましょう。

<習得したものを、文脈を変えられても活用できる力とは>

上記の問題において習得しておくべき力とは、「自分自身の経験と照らし合わせながら感想文を書くこと。」や「主人公の言葉を紹介したり、気持ちの変化が分かるように書くこと。」などがある。このような力を学習を通して身に付けた上で、この問題のように2人の文章を比べながら読み、共通点を見出す力も必要なのである。どんな設問方法であっても今まで習った知識を活用し、問題を読み取って表現する力が必要である。

3 単元を通したメタ認知力の育成

「習得したものを、文脈を変えられても活用できる力」を身に付けていくためには、単元を通してメタ認知力を育成していかななくてはならない。

- メタ認知力 —自分を客観的に見たり、見通しをもって行動したりする力のこと—
<メタ認知力を子どもたちが身に付けるための手立て>

このメタ認知力を確実に身に付けるために有効な手立てとして、単元の最後に学習というプロセスを通して自分の意見を伝え合う活動が挙げられる。

■お宝帳の作成

単元の最後に、①何ができるようになったこと、②分かったことや困ったこと、③疑問に思っていること、これからの学習で生かせることを、教児一体となって書きまとめて、累積していく実践例。この活動を単元ごとに継続していくことで子どもたちの確実な習得の力となり、いつでも振り返り、活用することができる「お宝帳」になるのではないかな。

◆登場人物を捉える観点（人物描写）

名前、性別、年齢、職業、住所、家族、境遇、特徴、特技、性格、人柄

4 物語の学習のワンポイント～人物描写とあらすじ～

物語を学習する上で、以上の観点をもって学習することが大切である。例えば「ごんぎつね」であれば、「ごんは、男？何歳？性格は？…」などと問うことができる。

- あらすじの指導で大切にしたいこと

あらすじを書く際に、①「設定」中心 ②「展開」中心 ③「山場」中心など、から③までの書き方で書く場合が考えられる。あらすじは、それらをすべてを網羅しなくてはならないわけではなく、①・②・③のどのパターンどれでも書くことができるようになることが大切である。

5 言語活動例の分析

<言語活動を通して、指導事項を指導する>

単元を通した言語活動を行う上で、身に付けたい力をまず把握する。その力を付けていくための指導事項を、言語活動を通して指導していくことが大切である。

- 学習指導要領「言語活動例」

「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の言語活動例を分析してみると、「説明から解説へ、報告から報道へ、紹介から推薦へ、感想から意見・批評へ」という流れが見えてくる。それは、「抽象から具体へ、単純から複雑へ、私的から公的へ」と段階（レベル）の違いである。これらの言語活動を、螺旋的・反復的に繰り返すことが必要である。

また、「C 読むこと」に注目してみると、言語活動例を『読書型』（ジャンルを広げて多様な読み方をする）と表現型（読んだことを話したり書いたりする表現へとつながる）に分けることが可能である。単元の終末に毎回表現物を作る必要はなく、『読書型』であれば、様々な本や文章の多様な読み方の工夫などについてメタ認知を促し、前述したような「お宝帳」にまとめることは効果的である。